



第 35 回（平成 21 年 3 月 11 日）定例会の研究発表要旨

記憶の先端にある稲穂

手稲郷土史研究会；副会長 一ノ宮博昭氏



当研究会の副会長である一ノ宮氏は、会員発表に何度も登場いただいております。その話しぶりの旨さや物知りぶりは会員皆様の良くご存知のところですが、今回は、現連町会長と稲穂在住 5 代目の立場から、わが町「稲穂」の今昔を、記憶と往時の写真を駆使し、かつ、「パワーポイント」のパワーも取り入れて『稲穂の記憶』と題して、熱弁をふるわれました。あつという間の 1 時間でした。以下、その概要を紹介します。

◆
例会発表のグレードの高さにいつも驚かされています。先般「ほまれ町内会」の話が出ましたので、負けじと「稲穂のまち」を漫談調でやらせてもらいます。

稲穂連町の現況は、15 町内会、5,904 戸、13,169 人となっており、昭和 39 年当時と現在のヘリ（自衛隊機）からの写真で、その違いを見てみました。今日、全町的に家屋などがひしめいていますが、この昭和 39 年の写真では、田んぼがあり、ほとんどが空き地、畑の連続で、家はぼつぼつとあるばかりです。

さて、この写真（写真略、以下同様）は、昭和 5 年（79 年前）の第 1 回敬老会のもの。次は、昭和 14 年の第 3 回敬老会のもので、青年団が主催して催していたようです。

当時は、隣り近所、あだ名で呼び合うのが普通だったようで、それも差別的なものもありました。（具体的紹介に会場は大爆笑となったが、ここでは割愛。）自分は、「ヒロ坊 ⇒ シロ坊」と呼ばれていた ~ 外で遊び回って真っ黒けの顔をしていたからか……。

とにかく往時は、何かあると町中が総動員で互助の精神で事に当たっておったようです。田植えや、葬儀など。

さて、次は、わが家 — 稲穂 1 条 1 丁目界隈からの定点写真を紹介します。その移り変わりを、建物の増え具合から見てください。

- ① 昭和 35 年（これがわが家一ノ宮宅。後ろは田んぼ）
- ② 昭和 38 年（町議員選挙立候補の親父の街頭演説のいでたち。三國農園の三輪トラック（選挙で手稲初の自動車利用）で）
※ 当時の選挙の票読みのすごさをひとくさり。
- ③ 昭和 46 年。④ 昭和 50 年。⑤ 昭和 52 年 ~ 53 年。
- ⑥ 初代の軽川駅舎（裏面記事参照） ~ 丸太作り、山小屋風 ~
※ 高峰秀子出演の映画のひとコマに。
- ⑦ 先代手稲山“パラダイスヒュッテ”（英語とドイツ語の混合語でめずらしい。日本でここだけかも。）
- ⑧ 昭和 40 年代の大運動会の模様。

これからは、連町行事など最近の活動の様子を紹介します。

- ⑨ 平成 8 年の町内フリーマーケット。お寺の境内で。次回のお品が底をついて、これ 1 回ぼつきり。
- ⑩ 平成 10 年の文化祭 ~ バイオリン独奏会を開いたが、聴衆は座布団座りに、ビール・お酒・つまみのお膳を前にしていたためか、次回もと頼んだが、体よく断られたとのこと。
- ⑪ 手稲鉦山ツアー（平成 18 年）。⑫ 新トンネル見学（H19）。⑬ わが庭にある樹齢 300 年の古木。
- ⑭ 恵庭旅行。⑮ 百人一首大会（平成 20 年）。⑯ 漬け物大会。

これらの町内会活動などが評価されたのか、『あしたの日本を創る協会』からふるさとづくり振興奨励賞の栄に浴しました（H15）。

以上、稲穂の今昔を記憶のままに紹介しました。

[文責：加藤]

次回の予定

次回（5 月 13 日）は、次の二人の会員発表を予定しています。

川崎吉充氏：「前田家余聞」

上仙学氏：「手稲区の 20 年をちょっと振り返ってみませんか」

食べて・飲んで・語って

「郷土史研懇親会」 盛会でした

総勢 60 数名の大所帯の我が郷土史研、会員同士の一層の親睦を目的に、ホワイトデーの 14 日、幹事による粋なはからいで「山口名産せんべい」の手渡しで宴が始まりました。

星置在任、伊澤副会長、加藤幹事、渡邊、久野木会員には準備万端大変お世話になりました。星置駅隣の「夢トピアコスモプラザ」という最高の会場で、テーブルいっぱいのオードブルに好き放題な「小樽ビール」、味も色もよりどり見取りの飲みものに、もうすっかり我も忘れて、いつもの定例会の真面目な形相はどこへやら和気あいあいの盛り上がり（過ぎ）でした。

でも幾ら飲んでも、やはり心から歴史が好きなのでしょうか？ あちこちからためになる話が聞こえてきます。

- ・ 窓越しに走る列車をながめると、そこはご存じ星置の急な崖、どのようにできたのかな、手稲山の成り立ちと関係ありそうだ、大昔の何万年前は、ここも湾流が激しく波打つ海だった。津波が襲ってきたら山の上へ避難できたかどうか、切実な会話です。
- ・ 濁川、清川、星置川はどんな川？ ほしおきは、ホシボキ、ホシボッケと呼ばれるくらい古くから開けた土地であり、誇り高き地名。
- ・ 山口のスイカ作りの皆さん、朝暗い内から馬車でガタゴト円山市場へ、それが〇〇農園でオート三輪車に切り替えてから、次々と免許取得に朝里へ通う農家続出。因みに稲穂地区は山口より後だった。
- ・ 三角屋根の星置団地に移り住んだ頃は、まわりにも何もなくさびしい所だった。でも自然いっぱい鳥獣には事欠かなかった。
- ・ …… まだまだ続きそうですが、例会に「誰を連れてきたい」「バス見学先はどこへ」と実に中身が濃かったり、首をかしげたりと有意義でした。

こうして予定の午後 3 時でお開きと思いきや居すわりが続き、最終退出は 5 時半ごろでしたか。「又やりたいね。」と……。

なお本日の最大の特記事項です。中山会員が江戸文化のお座敷遊びの一つで、手元にある箸 2 膳と盃とを使って「はし芸」を披露してくれました。「ひとつとせ一月」から始まって、12 月までの年中行事を哀調ある歌声で伝えていただき、すっかり魅入ってしまいました。私どもの知らない高しような文化に接し感激そのものです。ありがとうございました。【文責：茂内】



軽川駅でロケの映画

詳しい情報相次ぐ

一ノ宮 博昭

3 月例会で「稲穂の記憶」と題し放談、その中で丸太造りの山小屋風駅舎・初代軽川駅が映画「愛よ星と共に」の舞台になったと紹介しました。詳細不明の放談だったにもかかわらず、3 月 14 日浜埜静子さん、同 15 日加藤利昭さんから相次いで情報が寄せられました。

それによると、映画は 1947 年（昭和 22 年）、配給・東宝で、95 分の白黒映画でした。

牧場主の息子・池部良と牧夫頭の娘・高峰秀子が恋におちる。良が帰京して数か月、秀子は良の子を宿していた。牧夫頭は主人一家に傷をつけられないと認めず、秀子は良を頼って単身上京するが、良は既に渡仏した後。

よるべのない秀子は女給しながら出産するが、ほどなく死別、幾度となく自殺を企てる。悲運は続き、こんどは不倫と脅され、秀子は進退きわまって脅迫者を殺してしまう。証人のいない秀子は、きわめて不利なまま判決を待つ。

そこへ良が帰国する。良は秀子との過去を残らず証言、再審査を求める。やがて、秀子の正当防衛は認められ、2 人は晴れて結ばれる —— という筋だて。

演出・阿部豊、脚本・八田尚之ら。出演は池部良、高峰秀子のほか、横山運平、浦辺粂子、藤田進、一の宮あつ子ら。軽川駅はじめ道内各地で撮影されたといいます。軽川駅がどういう場面で登場するのかわかっていません。こんど、取り寄せてみなさんで見たいものです。

またしても分厚く裏付けていただきました。ありがとうございました。

【写真は雪に覆われた軽川駅 = 五十嵐丈人さん（稲穂 3-3）提供】

